

# shrink cities × fibercity @ akihabara

**shrinking cities × fibercity @ akihabara (略称：S × F @ A)**

## 「縮小する都市に未来はあるか？」

20世紀は世界規模で郊外への市街地の拡大、都心再開発による高度利用などが進められた時代でした。このような拡大と膨張を前提とする方法論は、環境問題と人口の縮小を抱える現代社会では無効になりつつあり、既に出来ているストックの維持すら困難になってきています。居住と社会活動を支える物的環境資本の質を維持し、歴史・文化・地域性を継承発展させるために、新たな技術の体系とビジョンが今、必要とされています。

ベルリンを拠点とするフィリップ・オズワルトは、世界の「縮小する」都市の実態に着目し、「shrinking cities」と名付けられた展覧会を2005年から欧米各地で開催し、研究者やデザイナーとともに調査・分析、芸術による表現、出版活動を通して問題を多角的に捉え、さらには専門を超えた多くの人々に問題の深刻さを訴えかけてきました。彼のプロジェクトは、'成長する展示'ともいべき考えに基づいたものであり、東京展では函館をとりあげ、現地の賛同者の協力を得て調査した成果が新たに加えられます。

一方、東京を拠点に発信を続ける大野秀敏が都市を対象とした長年の研究・デザイン活動を集約した「fibercity」は、今年9月に出版され話題を呼んでいます。これは人口減少の時代に突入し、少子高齢化が進行する日本の都市の衰退に警鐘をならすのみならず、東京を中心とした首都圏を持続可能な都市へと再編させる、具体的なデザインの戦略を提案しています。これは江戸から受け継がれた都市構造や既存の都市ストックを活用し、「縮小」の時代に最少の介入で都市を存続させる計画のパラダイムをビジュアルに提示するプロジェクトです。都市の大きなビジョンが語られることが無くなって久しい日本ではこれは貴重な提案と言えます。

「shrinking cities × fibercity@ akihabara」展は、都市の未来をめぐる東西二つの視点を、模型やテキスト、映像作品やインタラクティブなメディアにより紹介します。また本企画は展示することに留まらず、同時にこの場を討論の「広場」にしようという実験的試みを行います。会場に設けられたフォーラムでは会期中随時ワイン・インを行い、建築・都市の専門家と学生、行政、企業、地域の人々が、自らの提案をたずさえ幅広く集います。本企画は「縮小」をめぐる、新たな時代の哲学、技術・デザインを議論し、都市と環境に対する新たな知と芸術のあり方を問い直す野心的な試みです。

#### S × F @ A 組織委員会

大垣眞一郎（委員長）＋大野秀敏＋フィリップ・オズワルト＋日高仁＋山代悟＋北沢猛＋馬場正尊＋木下庸子＋渡辺保史＋三谷徹＋小林正美＋宇野求＋太田浩史

#### S × F @ A 実行委員会

大野秀敏（委員長）＋三宅理一＋フィリップ・オズワルト＋河瀬行生＋日高仁＋森田伸子＋松下幸司＋森正史＋稲光奈弥＋本間健太郎＋北雄介＋北島祐二＋池田健太郎＋大野友資＋佐藤圭奈＋佐屋香織＋谷口晋平＋中西祐輔＋三井嶺＋三好礼益＋森山一＋奥山枝里

#### ■ 展覧会 「shrinking cities × fibercity @ akihabara」

縮小する都市に未来はあるか？ 「Is there a future beyond shrinking?」

#### 趣旨：

この度、ベルリンを拠点とするフィリップ・オズワルト氏が企画し、欧州で大きな関心を集めた展覧会「shrinking cities」と、大野秀敏氏が縮小の時代の都市の未来像を提案する「fibercity」の二つの展覧会の合同展覧会『shrinking cities × fibercity @ akihabara』を秋葉原 UDX 内 AKIBA\_SQUARE で開催することになりました。この展覧会は、21 世紀のおかれている状況を「縮小」で捉え、都市と建築に関するパラダイムを構築する必要性を訴えています。

会期：2007 年 1 月 28 日（日）～2 月 18 日（日）

会場：AKIBA\_SQUARE（秋葉原 UDX2 F） <http://www.akiba-square.jp/>

開館時間：11：00～20：00（月～木）

11：00～21：00（金）

11：00～19：00（土日祝）

入場料：無料

主催：S × F @ A 実行委員会

共催：東京大学 21 世紀 COE「都市空間の持続再生学の創出」

ドイツ連邦文化財団 Kulturstiftung des Bundes、AkiDeCo

後援：日本建築学会、日本都市計画学会、住宅総合研究財団、千代田区、東京ドイツ文化センター（予定）、秋葉原電気街振興会、秋葉原再開発協議会 UDCK/ 柏の葉アーバンデザインセンター

協賛：NTT 都市開発、ダイビル、鹿島建設、クロスフィールドマネジメント、東京ガス、能村膜構造技術振興財団、トステム建材産業振興財団、Yamagiwa（予定）、日本航空（予定）

□ 関連企画 PopulouSCAPE

## ■ 国際シンポジウム

縮小する都市に未来はあるか? 「Is there a future beyond shrinking?」

趣旨:

shrinking cities × fibercity @ akihabara の一貫として展覧会 と連動して、国際シンポジウムを東大本郷キャンパスで行います。都市の縮小の現実をレポートする「Shrinking Cities」の企画者フィリップ・オズワルトと縮小する首都圏の未来像を提案する大野秀敏が、都市デザインの前線で仕掛け続ける論客蓑原敬氏と建築史学をベースに世界の都市デザインと建築シーンを挑発し続ける三宅理一氏の行動派を迎え、21世紀の都市を規定する「縮小」を巡って討論します。21世紀の都市と建築の未来を思考する人全てを刺激する、実践的かつ国際的視野にたった議論が期待されます。

日時: 2007年2月11日(日) 13:30 ~ 18:30 (開場 13:00)

会場: 東京大学本郷キャンパス工学部新2号館

東京都文京区本郷7-3-1 (HYPERLINK "[http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01\\_04\\_18\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_04_18_j.html)" [http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01\\_04\\_18\\_j.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_04_18_j.html))

参加費: 1000円

事前申込: S × F @ A 実行委員会

E-mail: [info@sfa-exhibition.com](mailto:info@sfa-exhibition.com) FAX: 03-5467-2646

プログラム:

13:00	開場
13:30 ~ 13:40	開会 趣旨説明 河瀬行生 (S × F @ A 実行委員会)
13:40 ~ 14:10	基調講演1 フィリップ・オズワルト (Shrinking Cities Office 代表)
14:10 ~ 14:40	基調講演2 大野秀敏 (東京大学大学院教授)
14:40 ~ 14:50	休憩
14:50 ~ 17:00	パネルディスカッション
モデレーター: 三宅理一 (慶應義塾大学大学院教授)	
パネリスト: 蓑原敬 (都市プランナー)、大野秀敏 (東京大学大学院教授)、 フィリップ・オズワルト (Shrinking Cities Office 代表)	
17:00 ~ 17:10	閉会の挨拶 河瀬行生 (S × F @ A 実行委員会)
17:15 ~ 18:30	レセプションパーティ

## ■ トーク・イン (Talk-in)

縮小する都市の未来を語る

趣旨:

私達は、今回のイベントを、都市の未来を考えるきっかけにしたいと思っています。それゆえ、トーク・イン (Talk-in) は、今回のイベントの重要な構成要素です。展覧会が提起する「縮小する都市」の未来について、建築と都市の環境に積極的に関わる第一線の行動派が集まり、未来に向けての提案を持ち寄り、意見を交換します。トーク・イン (Talk-in) は AKIBA\_SQUARE の展覧会と同じ空間で行います。展覧会の会期中の毎週末、9回のセッションを開催します。各回に設定されたテーマと関係のある提案を毎回9名が発表します。発表者の半分は公募により、皆でワイワイがやがや議論するという雰囲気です。会場には、カフェテーブルと椅子を40席ほど設けたいと思います。

ここでの議論の内容は、まとめて後日出版 (仮題『縮小する都市に未来はあるか』) する予定です。

日時：2007年1月28日（日）、2月2日（金）、2月3日（土）、2月4日（日）、2月9日（金）、  
2月10日（土）、2月16日（金）、2月17日（土）、2月18日（日）の9回

時間：17：00～20：30（金）、14：00～17：30（土、日）

会場：AKIBA\_SQUARE（秋葉原 UDX2 F） <http://www.akiba-square.jp/>

参加費：1回／1000円、フリーパス（何回でも参加可能\*）／3000円

\*フリーパスでご参加の場合も、事前申込は必要です。

事前申込：S×F@A 実行委員会

E-mail：info@sfa-exhibition.com FAX：03-5467-2646

テーマとモデレーター：

- ① 1月28日（日） 時間をデザインする：日高仁&山代悟（東京大学）
- ② 2月2日（金） 都市の未来を描く：北沢猛（東京大学）
- ③ 2月3日（土） 長生きする建築：馬場正尊（建築家）
- ④ 2月4日（日） 住まいとコミュニティ：木下庸子（日本大学）
- ⑤ 2月9日（金） コミュニティに根ざした情報デザイン：渡辺保史（智財創造ラボ）
- ⑥ 2月10日（土） 森と水：三谷徹（千葉大学）
- ⑦ 2月16日（金） 住民とまちをつくる：小林正美（明治大学）
- ⑧ 2月17日（土） 地域の力を引きだす：宇野求（千葉大学）
- ⑨ 2月18日（日） 街を楽しくするサービス：太田浩史（東京大学）

## テーマ「シュリンキング・シティ——縮小する都市」

この200年来、グローバルな規模で急速に都市化が進んでいます。1800年頃は全世界の10億人の人口のうち2%が都市に暮らしていましたが、2000年には約65億人にのぼる全人口のうち50%近い数字になりました。さらに2050年には、全人口約85億人のうち約75%が都市に暮らしているだろうとされています。しかし、すべての都市が成長するわけではありません。1950年から2000年までの間に、特に古くからの先進国の中で、少なくとも一時的にでも明らかに人口が減少した大都市は全世界に350以上あります。1990年代には全世界の大都市の4分の1以上が縮小しました。今後数十年間は成長プロセスのほうが引き続き優勢だとしても、縮小する都市の数は常に増えてゆきます。ただ、この現象の終わりは予測可能で、2070年／2100年頃には世界の人口が頂点に達し、広範囲にわたって都市化プロセスが終わりを告げるでしょう。そうすると成長プロセスと縮小プロセスのバランスがとれ、都市の縮小は、産業化が始まる以前にそうだったように、都市の正常な発展プロセスとなるでしょう。

しかしこれは、発展した先進諸国の視点から今見るとなかなか想像しがたいことです。何世代にもわたって、私たちは多くの分野でほぼ常に成長を体験してきましたし、今までのところ全世界的に見て、成長プロセスのほうが支配的なのですから。しかし、成長する場所は地理的にますます偏り、すでに縮小プロセスに転換しているところも多いのです。一連の国々ではもう都市人口の総数が減少しています。原油価格や原料価格が劇的に高騰し、人間が原因をつくって気候が温暖化していることを見ると、成長の限界を身をもって感じるところです。

こういった意味では、都市の発展を見れば根本的な時代の交替がはっきりと目にみえ、時代が変遷していることが分かります。人類史上で考えれば、現代の成長時期は時間的には非常に限られた、300年にも満たない期間にすぎません。時代の終わりは数十年も前からその兆候を現しており、西洋および東洋の古くからの先進国では、その兆候はすでに歴然としているのです。

「縮小」は——かつて「成長」がそうであったように——社会の根底を揺るがすもので、理想像や行動モデルや実践のあり方を変化させながら、社会全体の方向転換を余儀なくさせます。都市縮小という現象の根底には、さまざまな変化のプロセスがあります。過去数十年に都市の縮小プロセスが集中して現れた古くからの先進国に関していえば、縮小の根本的な要因は郊外化、産業の空洞化、人口減少、ポスト社会主義への変化です。「シュリンキング・シティ（縮小する都市）・プロジェクト」ではこういったプロセスひとつひとつに対し、それぞれのプロセスが特に顕著に現れ、まただからこそ分析や記録が可能な都市および都市周辺地域を、典型的な例として選びました。自動車産業都市であるデトロイト（アメリカ合衆国）は、都市の郊外化プロセスによって引き起こされた縮小の代表例です。繊維産業地域であるイヴァノヴォ（ロシア連邦）はポスト社会主義への変化による縮小の代表例であり、かつての産業地域マンチェスター／リバプール（イギリス）は産業の空洞化によって導かれた縮小の代表例です。これら三つのプロセスはすべて、四つ目の例の中にも見られます。四つ目の都市はハレ／ライプツィヒ（ドイツ）です。また先頃、日本の函館が人口動態による縮小の例として本プロジェクトに新たに加わりました。

## プロジェクト「シュリンキング・シティ——縮小する都市」

「シュリンキング・シティ——縮小する都市」はドイツの連邦文化財団のイニシアティブによるプロジェクトとして、フィリップ・オスヴァルト・プロジェクトオフィス、ライプツィヒ現代美術ギャラリー、デッサウ・バウハウス財団、『archplus』誌との協力により実施されています。HYPERLINK "<http://www.shrinkingcities.com>" [www.shrinkingcities.com](http://www.shrinkingcities.com)

研究・展示プロジェクトの第1期は縮小プロセスの国際調査に費やされました。100名を超えるアーティスト、建築家、都市プランナー、ジャーナリスト、学者が参加し、2年以上かけてデトロイト（アメリカ合衆国）、マンチェスター／リバプール（イギリス）、イヴァノヴォ（ロシア）、ハレ／ライプツィヒの都市地域を分析し、記録しました。プロジェクト第2期は国際コンペを開催し、奨学金、直接委託によって行動の可能性を模索しました。10カ国のアーティスト、建築家、学者、地域のイニシアティブによる34のプロジェクトが生まれ、その内容は芸術的な介入やセルフ・エンパワーメント・プロジェクトから、建築、景観、メディアによる都市への介入を越え、新しい法規定やユートピア構想にまで至ります。大多数のプロジェクトは国民や地域のグループや機関との緊密な協力によって進められました。

プロジェクト（2002年～2006年）の成果はベルリンのクストヴェルケ（KW）コンテンポラリー・アート研究所（2004年秋）、ハレ＝ノイシュタットのインターナショナル・コンテンポラリーカルチャーセンター（ZfzK）、ライプツィヒ現代美術ギャラリー（2005/2006年冬）での展示会や、多くの書籍、デジタル出版物で発表されました。

チーフ・キュレーター：フィリップ・オスヴァルト（建築家／ライター、ベルリン）

キュラトリアルメンバー：Nikolaus Kuhnert（『archplus』誌、ベルリン）、Kyong Park（国際都市環境センター、デトロイト）、Walter Prigge（デッサウ・バウハウス財団）、Barbara Steiner（ライプツィヒ現代美術ギャラリー）。

分析期間（2002年～2004年）の現地キュレーター：デトロイト：Mitch Cope（アーティスト／キュレーター、デトロイト）、Kyong Park（アーティスト／キュレーター、ニューヨーク）、Dan Pitera/DCDC（アーティスト、デトロイト）；イヴァノヴォ：Sergei Sitar（建築家／ライター、モスクワ）、Alexander Sverdlov（建築家、モスクワ／ロッテルダム）；リバプール／マンチェスター：Joshua Bolchover（建築家、マンチェスター）、Paul Domela（キュレーター、リバプール）、Philipp Misselwitz（建築家、ベルリン／テルアビブ）

東京での展示会は国際的な巡回展示会の4番目にあたります。この巡回展示会は2006年にベネチアで開催された第10回建築ビエンナーレでの発表と、ニューヨークのプラット研究所およびヴァンアレン研究所、ブルガリアのラルースでの展示会を皮切りに始まったものです。今後の展示会開催地は次の通りです。デトロイト：クランブルック美術館、ブルームフィールドヒルズ／デトロイト現代美術館（MOCAD）、2007年2月～3月。イギリス：2007年夏。ドイツ、ザールブリュッケン：E-Werk、2007年秋。ドイツ、ルール地方：ドルトムント他、2007年秋。ドイツ、フランクフルト・アム・マイン：フランクフルトのドイツ建築博物館（DAM）、2007年11月～2008年1月。ロシア連邦、サンクトペテルブルク：プロ・アルテ・インスティテュート、サンクトペテルブルク国立歴史博物館協力、2008年3月～4月

## 出版物

Schrumpfende Städte, Band 1: Internationale Untersuchung (シュリンキング・シティ——縮小する都市 第1巻：国際調査)

Philipp Oswalt 編、736 頁、写真・図版 500 点以上（大半がカラー）

Hatje Cantz Verlag 出版、Ostfildern、2005 年

ISBN-13 978-3-7757-1682-6（英語版）、39.80 ユーロ

縮小プロセスの原因と影響を、具体例をもとに全世界さまざまな場所で分析した初めてのプロジェクト。国際調査では人口の減少や経済の縮小が顕著に見られる都市地域での生活条件と文化的変化を集中的に取り扱う。主な調査対象都市はマンチェスター、リバプール（イギリス）、デトロイト（アメリカ合衆国）、イヴァノヴォ（ロシア）、ハレ、ライプツィヒ（ドイツ）。

非常に大きな問題をはらみ、今までにない新たな社会問題となっている現象に対する意識を、文化的な調査と芸術作品によって高めるもの。

執筆陣は Robert Fishman、Linda Grant、Dave Haslam、Susanne Hauser、Klaus Müller、Klaus Ronneberger、Thomas J. Sugrue、Kevin Ward、他。写真は Stan Douglas、John Ganis、Ken Grant、Bas Princen、Tom Wood、他による。

Schrumpfende Städte, Band 2: Handlungskonzepte (シュリンキング・シティ——縮小する都市 第2巻：行動コンセプト)

Philipp Oswalt 編、896 頁、17 x 22.5 cm、写真・図版 400 点以上（大半がカラー）

Hatje Cantz Verlag 出版、Ostfildern、2006 年

ISBN-13 978-3-7757-1711-3（英語版）、39.80 ユーロ

縮小する都市との取り組みで、古典的な都市プランニングはその限界に至り、新たな課題に向かい新たな道をゆくこととなる。本書は縮小する都市のための実験的な行動コンセプトについて国際的に概観するが、その出発点はさまざまで、セルフ・エンパワーメント・プロジェクトやアートとしての都市への介入から、建築、景観、メディアによる都市への介入、さらには新しい法規定やユートピア構想にまで至る。北米、ヨーロッパ、日本での最近のプロジェクトの他に、建築や芸術に関する重要な歴史的対象についても一連のエッセイで批判的に議論されている。

執筆陣は Ash Amin、Regina Bittner、Jörg Dettmar、Dan Graham、Wolfgang Engler、Robert Fishman、David Harvey、Juan Herreros、Bart Lootsma、他。プロジェクトは Will Alsop、Ruedi Baur、Florian Beigel、Chaos Computer Club、Crimson、Jeremy Deller、M. J. Ginzburg、Gordon Matta-Clark、muf、大野秀敏、OMA、Cedric Price、Andreas Siekmann、Robert Smithson、Superflex、Oswald Mathias Ungers、他による。

Atlas der schrumpfenden Städte/Atlas of Shrinking Cities (シュリンキング・シティ・アトラス)

Philipp Oswalt、Tim Rieniets 編、160 頁、26.7 x 37.5 cm、カラー地図多数、ドイツ語・英語

Hatje Cantz Verlag 出版、Ostfildern、2006 年夏

ISBN-13 978-3-7757-1714-4、39.80 ユーロ

どの都市が縮小しているのか。その都市はどこにあるのか。縮小のもとになっているのはどんなプロセスか。シュリンキング・シティ・アトラスは世界地図約 30 点、統計図表 50 点、都市の写真 40 点、事典形式のエッセイ 15 稿、都市目録 1 点を駆使してグローバルな縮小現象を記録し、また、革新的なグラフィック化によって現象を視覚的にも捉えやすくしている。

アーヘン（ドイツ）の archplus 出版社では多数の映画、音楽、調査資料を集めたデジタル出版物『Shrinking Cities – Complete works Vol 1 + 2 CD/ DVD (シュリンキング・シティ——コンプリート・ワークス Vol 1 + 2 CD/ DVD)』を発売中。  
[www.archplus.net](http://www.archplus.net)

## 連絡先

Project Office Shrinking Cities

Astrid Herbold

Eisenacher Strasse 74

Berlin, D-10823

Tel: +49 (30) 81 82 19 06

HYPERLINK "mailto:press@shrinkingcities.com" [press@shrinkingcities.com](mailto:press@shrinkingcities.com)

HYPERLINK "http://www.shrinkingcities.com" [www.shrinkingcities.com](http://www.shrinkingcities.com)

Shrinking Cities is a project of the Kulturstiftung des Bundes [German Federal Cultural Foundation] in cooperation with the Project Office; Philipp Oswald, Gallery for Contemporary Art Leipzig; the Bauhaus Dessau Foundation; and the magazine archplus.